地蔵峠

きさらぎ　いち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
地蔵峠

【Ｎコード】
Ｎ８８０５Ｐ

【作者名】
きさらぎ　いち

【あらすじ】
地味な短編です。
北日本文学賞一次落選産物。

車の中に打ち棄てて来た地図には《地蔵峠》とだけ記されていた。

緩い登りが続く峠道を歩き続けて小一時間、彼は後悔をし始めていた。

――車で登ってくれば良かったか。

村道の入り口で、踏みしめる度にきゅっきゅっと泣く薄く積もった雪を見て、車では無理かと思い置き去りにしてきたのだけど、この程度の雪なら無理なく走れたかもしれない。地図の上ではただの林道の扱いになっていたが、この山を抜けて隧道が通るまでは立派な県道だったはずのこの道は、営林署の軽トラックがぎりぎり走れる程度の幅でしかないが、自分の乗ってきた車も大きさで言うなら大差なかった。

――一応、四駆なんだしよ。

決して運転に自信があるわけではないが、自分の腕でもこの程度の雪道なら……ちらちらと目の前に揺れる粉雪を見ながら、三分に一回は繰り返し続けた後悔をまた、冷たい溜息にして吐き出した。けれど今更車を取りに引き返すのも馬鹿らしい。後悔している自分を誤魔化すように

――まぁいい。ここまで来たからには今はこの峠を抜けることだけを考えるんだ。

落ちてくる雪に逆らうように、白い空へ向けて息を吐いた。

地図に記されていたカーブの数が正確なら、じき峠に辿り着くはずだ。

「地蔵、峠……か」

目立つ国道から山に入ってゆく県道に逸れてみたはものの、そろそろこの道を走り続けるのも限界かもしれないと思い始めた頃、助手席に投げてあった地図に、救いを求めるように開いたページでそ

の文字を見た。他にも山を越える道は幾つかあったし、もっと手近に逸れる角もあったのに。なのに何故だか『ここを超えなければいけない』気持ちが沸々と湧き上がってこんな所まで来てしまった。

「別に珍しくもなんともねぇ峠だろうによ」

日本中に《地蔵》と名の付く場所は幾百とあるのだ。事実、彼の生まれ育った生家の傍には、周囲に地蔵が在るわけでもなかったのに《六地蔵橋》という農業用水路を跨ぐ橋があった。だからこの峠にしても名の由来など怪しいものだと思いながら。

しかしやがて、彼は後悔する気持ちがあったことすら、まだ余裕だったのだと思い知らされる。

踏めば足跡を薄く残す程度と侮っていた雪道は、やがて踏み続けることで靴にしがみついた僅かな結晶から溶けて靴に染み込んで足元を甚振るようになっていた。解けた雪は靴の中でぐちゃぐちゃとせせら歌うように指先に絡みつきながら痛めつけてくる。

「畜生！　この安物の靴が！」

合皮の靴の中で冷たい水がびちゃびちゃと不愉快な音を立てて足に纏わりつく。真白な雪が暖かな真綿に見えてきて、いっそ靴なんか脱ぎ捨てた方が楽かもしれないと、そんな錯覚に襲われてきた。しかし、次のカーブを曲がって開けた景色を目の当たりにして、今までの後悔も自棄になり始めていた気持ちも吹き飛んだ。

両側に聳え立っていた杉林は消え去り、片側には崩れた痕の殺風景な山肌が聳え、反対側には遙か麓まで引き摺られながら落ちていった木々と土砂の痕が続いている。目の前にかろうじて開けている道は車一台がどうにかぎりぎりで通れるほどの広さしかないうえに、崩れた土砂のせいで崖に向って道が傾いているのだ。

ぞっ、とした。

こんな道を車で通る自信はない。

傾いた道をそろそろと歩きながら、軽い風でもひとつ吹けばふわりと崖に落ちてしまいそうで、呼吸して息を吐き出すことすら恐ろしい。ゆっくりと難所を歩き、土砂が積もった箇所を通り過ぎて道

が平に戻ったところで、額にどっと汗を噴出した。とはいえ、片側の崩れた崖はまだ続いている。彼は用心のために山側に張り付くようにして歩いた。

こうなると調子の良いもので、やっぱりあの時車を乗り捨てた自分の判断は正解だったのだ、などと思ってしまう。先ほどまでの後悔の嵐など喉元過ぎれば何とやら、だ。

しかしそれも、こんな事態になると予測して車を降りたわけでもないのに……と、ふと冷静に思い返してしまった。

――こんなんだから、俺はダメなんだ。

自虐の念で胸を詰らせる。

遥か下方に続く崩れた山肌を見下ろしながら、自分の人生も人里から遠くなり忘れ去られて惨めに崩れた峠道と同じもんだ、と、足を止めて息を吐いた。

ここまで息せき切ってやって来たが、もうこれ以上動ける気がしない。薄く雪の積もった山肌にもたれかかり、全身を冷たい斜面に預けると、急に力が抜けてきた。

――終ったな……俺も……

膝がカクンと音を立てて折れた。その瞬間、

「おじさん、大丈夫？」

不意に、すぐ横から声をかけられて彼は飛び起きた。

ここには誰も居なかったはず。驚いて身をよじった先が崖だったせいで体が大きく傾いた。支えるために伸ばした腕は雪の表面を上滑りして、崩れた崖に向ってずるずるとずり落ちてゆく。

助かりたいと思ったわけではない。

けれど本気で死にたいとも思っていたわけではない。

どちらともつかない気持ちのまま、頭で考えるよりも先に腕が空に向って伸びた。その腕を掴んだのは、想像にもできないほど小さな手だった。その小ささに相応しい幼い声がゆっくりと語りかける。

「ここはまだ緩いけん大丈夫。ゆっくりこっち向って転がって」

何もかも投げ捨ててこんな所にまで来たのだと彼はずっと自らに

言い聞かせて来たのだが、実際にはまだこんなにも生汚い性根があったのか、這々の体で声のする方に向って転がり登った。
「あぁ……ありがとう……」
荒い息で自分を引っ張り上げてくれた小さな手の主を改めて見て、また更に驚かされた。子供の年齢など見当も付かないが、自分が住んでいた家の周辺を朝な夕なに行き来している学童と同じほどだろう。
「大丈夫か？　おじさん」
大丈夫かと問う言葉とはうらはらに、その声は無邪気に響いた。
「ああ。大丈夫だ。ありがとう、助かったよ」
「なら、ええんだ」
子供はにんやりと笑い、『けんど……』と続ける。
「ぶつぶつ言いながら歩きよるかと思うたら、急にしゃがみよるけん、どがいしようかと思うた」
にっこりと笑うその顔を、どこかで見た、と彼は思った。
いや、それよりも、この子供は自分がここに来る前から居たのだろうか？　この見晴らしの良い道で、自分以外の誰かが居たようには思わなかったのだが。
いぶかしんでみても答えは出ない。問いただしたい幾つかの疑問の中からひとつだけを選んで口にする。
「キミはここで何を……？」
子供は唇の端をにっこりと緩めたまま道の端に視線を落とした。
「花を持ってきた」
「花？」
しかしそこには何があるというわけでもない。ただ、子供の膝丈程度の穴がぽっこりと空いていて、その中に赤い花が無造作に横たわっている。
「何もないじゃないか」
「うん、何もないな。何も」
「何も無い所に何で花なんか」

「それが僕の仕事やけんな」
返事に戸惑うことなくつらつらと言ってのける子供の横顔を見ながら彼は一瞬呆気にとられた。
ここまで歩いて来るのに大人である自分でさえ一時間はかかったというのに、子供一人でこんな何も無い所に花を持ってこさせる仕事だと？
何のために？
誰が？
いや、もしかしたら子供一人な風に見えて実はあの先のカーブを曲がったあたりで親が様子を伺っているのかもしれない。
ハタと思い付き、彼の背筋に一抹の緊張が走った。
子供は、そんな彼の心情など意にも介さず、
「ここから下り道になるけん、気をつけて歩きなよ」
再び彼の手を取り引っ張った。
「いや、俺は……」
道の先に他の大人が居るなら鉢合わせするのはあまり嬉しいことではない。小さな手を振り払おうと彼は強く腕を振った。
「あっちから来たんなら、こっちに下りるしかないやろ？　僕はこっちに帰らないけんから、一緒に行こうや」
振り払えなかった。
それは、子供の無邪気な親切のせいのようでもあり、――何だ、この力は？　繋がれた手と手を引き離さないように不思議な引力が働いているかのような重たさで結ばれている力のせいでもあった。
結局彼は子供の言うがままについてゆく事になってしまった。
――しょうがない、もし向こうに親が居たとしても、俺のことを知っているとは限らないし……いざとなったら……
彼は心を決めて子供の手を握り返す。それをどう汲み取ったのか、子供は彼を仰ぎ目も唇も緩い弓状に細めて笑んだ。
はたして、峠を越えた先のカーブに彼の案じていた親などの姿は無く、また会話の節々から子供が本当に一人でここまで来ているこ

とを知って彼は、にやりとほくそ笑んだ。
「こんな所に花を持ってくる仕事なんて一体何なんだい？」
「わからん。もうずっと昔からやから」
「大変だろう？　この雪の中」
「別に。もう長い事しよるし」
「でもこんな事やってたら学校にだって行けないんじゃないか？」
「学校？　それは僕の仕事やないなぁ」
「……もしかしてキミの家は熱心な宗教家だったりするのかい？」
「宗教？　わからんなぁ」
訳がわからない。しかし、この場所で子供と巡りあえたということは自分の運もまだ終ってはいないのかもしれない、彼の心の中がざわめいてきた。世の中は子供に対してとかく甘い。
――これは利用させてもらわないとな。
「良かったら麓まで一緒に行ってもいいかい？　ほら、一人でこんな道歩いててもつまんないだろ」
彼は軽く腰を屈めて子供の手を取った。手袋をしていないそれは石のように冷たくて、思わずぞくりとしてしまったが、この雪の日に歩き回っていれば冷たくもなって当然だろう。改めて子供を見直すと恐ろしく薄着でいることに気付いた。灰色のセーターをざっくりと羽織っただけで、手袋はおろか帽子もマフラーもつけていない。
この雪の中にこの軽装で、親は何を考えているんだ？　――非常識な。ほんの数秒前には『この子供を利用する』腹積りであったものを棚の上に追いやって、子供の家庭事情も解らないまま純粋に怒りが込み上げてきた。小さな手をぎゅっと握り締める。
しかし当の子供は彼の揺れる思惑など気付くこともなく
「ええよ。僕は慣れた道やけど、おじさんと歩いたるわ」
にっこりと笑う。
その笑顔に微かな痛みを胸に覚えたが無理矢理に腹の底へ沈め、痛みを誤魔化すように片頬で彼も笑った。
「ところで、おじさんはやめてもらえないかな。まだ二十台なんだ。

せめてお兄さんと呼んでくれないか」
「ふぅん……ええよ」
大きな掌にすっぽりと治まった小さな手をにぎにぎと遊ばせながら、また笑う。
――よく笑う子だな。
どんな家庭のどんな仕事だが解らないが、こんな雪の降る山の中にこんな薄着でたった一人で使いに出されて、こんなに笑っていられるものだろうか。自分だったら……
彼は掌の中で遊ぶ小さな指を強く握ったり緩めたりしながら、遊び返した。これ以上何を聞いてもこの子供には明確な答えなぞできないだろう。それに、無駄に関心を持ってしまってこの子供に深入りする結果になってしまっても困るのだ。今の自分自身にそんな余裕など無いことを思い出した。
――いいさ、麓まで降りて新しい足を手に入れるための、切り札だ……それまでの道連れだ。

崖崩れで荒れていた道がまた鬱蒼とする杉林に戻ってゆく。下り始めた道で子供は最後に峠を振り返った。
「この道なぁ、下に隧道が通ってからは、来るのは山の手入れの車ばっかりなんよ。あとは、たまーに……」
「たまに？」
「迷うた人が通るだけ、かなぁ」
「迷った？　道に？」
しかし子供はその問いに答えを返さなかった。
「僕な、久しぶりにここで人に会うたん。嬉しいんよ」
それから、昔は舗装こそしていなかったがマイクロバスも通る立派な生活道であったこと、子供も大人も学校や物売りにいろんな理由で往来し賑わっていたことなど、ぽつりぽつりと話してくれた。まるで自分がその時代を過ごしてきたかのように。
――年寄りあたりの受け売りかな。

おそらく、子供の周りに居る年寄りが話し聞かせる毎日なのだろう。曰く、『あの頃は良かった』と。
――ってぇことは、このガキの家はそういう年寄りばっかりってことか。
母親はともかく、家に働き盛りの若い者が居るようでは目論みも上手くいきにくいだろうが、そうでないのなら彼にとってはありがたい。子供をよく見れば着ているセーターも随分と古めかしく、所々ほつれていて直された様子もない。
「……で、ねぇ、その頃は賑やかでもあったけんど、よう人も死んだんよ」
「え？」
「こんなきれいな山になる前は、崖ももっと急やったし、足滑らせて落ちてしまえば助からん人もおったし」
そう言われて改めて見ると周囲は見事な杉林だ。なるほど、山が整備されて植林される前のことかと、彼も納得した。
それにしても、そんな話をしながらも子供はにっこりと笑う。人に会うのが久しぶりで嬉しいと言った。
――どれだけ閉ざされた環境なんだ。
この現代に。しかし、それすらも今の彼にとっては都合良かった。
「そうかい。それは大変だったろうね」
適当に相槌を打っていると、子供はまた繰り返した。
「今はほんとうに迷うた人が、たまーに通るだけかなぁ」
「ふぅん」
「お兄ちゃんも迷うたんか？」
「いや、僕は……」
迷ったわけではない。けれど迷っていないとも言い切れない。
「でも大丈夫やけん。迷うてても、真っ直ぐ行けば間違いなく出口はあるけん」
彼は返事に戸惑った。別に、出口を求めての旅でもない。そもそも何らかのアテがあってこの林道に足を踏み入れたわけでもない。

生返事で適当に誤魔化すか……彼がそう思い口を開こうとした時だった。子供が急に足を止めた。
「どうした？」
「麓が賑やかやなぁ」
言われて下方を覗くと、木立の合間から林道を抜けて県道に合流する三叉路が見える。まだ先は長そうだがそう遠くでもない。
もうこんなに下ってきたのか……つらつらと喋りながら歩くうち、峠から半分ほどは進んだようだった。
三叉路には十数人ほどの人の姿と、数台の車が見える。車の屋根に赤いランプからちらちらと揺れているのを見て、彼は『ちっ』と舌打ちをした。
――あっちに置いてきた車が見つかっちまったか。
とすれば、元来た道を戻っても間違いなく彼らはそこで待ち受けていることだろう。道中に他所へ逸れる道を持たないこの峠に入ってしまったのはやはり間違いだったか。
山に置き去りにしてもさして目立たない軽四の古い車を選んで盗んだのに、たいした時間稼ぎにもならなかったな……と、すれば気まぐれにこんな山に入ってしまうより、もっと複雑な街中あたりに逃げ込めば良かったか……後悔を巡らせながら子供の手を更に強く握りしめた。
――こうなりゃやっぱりこのガキを人質にして。
失敗に代わる策略を巡らせながら緩いカーブを曲がった。
と、そこに突然古い民家が現れた。
「家？　何でこんな場所に？」
ふと子供に目をやると、相変わらずにっこりと笑んでいる。
「もしかして、キミの家かい？」
しかし子供は首を横に振った。
「違うのか？　まぁ確かに……とても人が住んでいそうには見えないしな……廃屋ってとこか」
しばらく彼は考えた。今この家に入ることは得策ではないかもし

れない。けれどこのまま麓に下りれば間違いなく？まるだろう。
「時間稼ぎにしかならねぇか……」
それでも、少し休めばいい案のひとつも浮かぶかもそれない……
子供を引っ張りながら彼は壊れた玄関を蹴り飛ばし土間へ入った。
舞い上がった埃を思い切り吸い込んで、胸を抱えながら散々に咳き込みながら靴のままで和室に上がる。襖を開け、次の部屋へ。納戸へ。台所にトイレに風呂へ。
十年以上は誰も住んでいないのだろう。やっと足を止めた部屋の片隅に置かれた古い机には懐かしいヒーローのシールが貼ってあった。
もしかしたらこの机の持ち主は自分と同じ年頃なのかもしれない。しみじみと眺めていると、この家に入ってから初めて子供が口を開いた。
「この家はお兄ちゃんの家なん？」
「はぁ？　知らないな、こんな家」
「でも家の中全然迷わないで歩いてたよ。どこに何があるのか知ってるみたいだったよ」
「確かに似たような家には住んでいたが、俺が育ったのは海の傍だ。こんな山の中じゃない。それに……」
「あ！」
「どうした？」
「刀！」
「何ぃ？」
今度は彼が子供に引っ張られる番だった。
勢いよく駆け出した子供は押入れの前で座り込んだ。
「ほら」
僅かに開いた隙間から切っ先が覗いていたのだろう、玩具の刀を引っ張り出して得意気に振ってみせた。
「何だよ、玩具かよ。びっくりさせやがって」
子供は手を繋がれたまま、刀を振り続けた。

「そういえば俺もそれ、同じの持ってたな」
彼が子供の頃に流行っていたヒーロー番組の主人公が使っていた武器だ。
「色々変形したり他の道具が仕込まれてたりして凝ったのが多かったのに、それは刀だけのシンプルなやつだったから、逆に新鮮だったなぁ」
思わず懐かしい物を見て感慨に耽っていると、ガタンと激しい音が響いた。
――やべぇ！　サツか？
物思いに耽っている場合ではなかったことを思い出して目をぎらつかせる。
「ごめんなさい、壊しちゃったぁ……」
振り回していた刀が机の脚に当たり、脆くも折れて崩れてしまったのだ。
「何だ、キミか……」
ホッとしながら『ごめんなさい』とほっこり笑う子供に、こんな時でも笑うんだな、と思いながら小さな頭を撫でる。
「気にするな。どうせもう誰も住んじゃいないんだ」
「でもこの家、お兄ちゃんの家やろう？」
「だから違うって……」
「ほら、ここの傷、お兄ちゃんがこの刀でつけたんやろ」
机の横の土壁に、小さな窪みができていた。
「あ、あぁ。確かにそれは……」
覚えがある。この刀を買ってもらって嬉しくて振り回していて、この土壁に穴を開けた。いいや、それだけではない。ちょっと見渡せばあの柱の傷も、襖の破れた跡も……
「そんな……」
そんな筈はない。彼は自分に言い聞かせるように周囲を見回した。
「そうさ、こんな家に子供が居ればどこも似たような傷があって当然だろ……でも……」

あまりにも自分の記憶にある我が家と似すぎていて。
「七歳、達矢。ねぇ、これお兄ちゃんか？」
「何で僕の名前を！」
振り返ると子供は部屋の入り口の柱をじっとみながら、刻まれた線と名前を指差していた。
そこには七歳だけではなく、三歳から九歳まで七本の線が刻まれている。
「違う……僕の家はこんな山の中じゃなかったし……でも、名前？
いや同じ名前のただの偶然だ……」
「違うの？」
「僕の家であるわけがない。あの家はとっくの昔に火事で……ゴミを燃やしていた火が飛んで……あの火事で母さんが死んで……」
あれから、父方の祖父母の家に身を寄せた。亡くなった母に代わって年寄りに育ててもらった。
その祖父は五年前に他界し、今は老いた祖母を父と共に面倒見る立場へと逆転している。
「婆ちゃんには世話になったんだ。だから今度は俺の番だって……だのに、オヤジのやつ手間がかかるだの大変だの金がかかるだの言いやがって……」
「だから刺したの？」
「そうだよ！　自分は仕事に出てばっかりで何も知らないくせに、婆ちゃん達がどれだけ俺たちを支えてくれたか知らないくせに……」
感情が昂っていた。だから思わず聞き流してしまったが、思いのたけを叫んで我に返ると、彼は背筋を凍らせてしまった。冷たい汗が全身から吹き出る。
何故、この子供が《それ》を言う？
「おまえ、何なんだ？」
振り返り見た子供はやはり、にっこりと笑んでいた。
緊張で強張る彼の背中に、きゅっと薄い雪を踏む音が鳴った。
「その話は改めて署で聞かせてもらおうか」

――しまった。
やはりこんな廃屋で足止めすべきではなかったのだ。この子供を人質にパトカーを盗んで強行突破するべきだったのだ。しかし後悔は遅かった。
いや、まだ望みはある。この子供が自分の手の内にある限りは……
「それ以上近づくな。でないとこのガキの命は……」
彼はズボンの尻ポケットに隠していたさな折りたたみのナイフを開いた。
「子供？」
警察が訝しげに問い返す。
「このガキだよ」
盾にしようと引っ張ったその手は、とても軽かった。
「あ、あれ？　今さっきまで……」
「ずっとお前は一人だったが？」
「いや、今さっきだって刀でそこの壁を……」
「どこの壁だって？」
慌てて彼は周囲を振り返った。しかし、そこにはただ、薄く雪を被った杉の林が聳えるばかり。
言葉を失い立ちすくむ彼に、警察が冷静に告げた。
「石崎達矢、実父への暴行で逮捕する。さぁそのナイフをこちらに渡しなさい」
狐につままれるとはこういうことを言うのだろうか？　彼はこの状況が理解できないまま、抗う気力も失ってしまった。立ちすくみ成すがままに警察に腕を掴まれる。その彼に警察がそっと耳打ちをした。
「父親から話は聞いた。抒情酌量の余地はあるようだから、ちゃんと話すんだな」
「……え？」
「良かったな。お前は父親を殺さずにすんだんだ」
「でも、血が出て、動かなくなって……」

「おまえが家を飛び出した後、お婆さんが通報してくれたんだ。達也を助けてくれ、と。父親を刺した後悔でおまえが自殺するんじゃないかと心配していた」
「嘘だ、婆ちゃんは寝たきりで……」
警察は数秒黙ったが、やがて重く言った。
「人智を超える何かってのは、在るもんなんだろうな」
冷たい鉄の輪が彼の腕にかかる。
その冷たさに彼はふと思い出した。
握り締めた小さな手は、石のように冷たかったな、と。と、同時にやたらと子供の言葉が頭の中で繰り返される。
『迷うてても、真っ直ぐ行けば間違いなく出口はあるけん』
これが俺の出口なのか？　捕えられて、逃げおおすことも出来ずに。
あの廃屋は何だったのだ？
火事で一瞬にして失った我が家と瓜二つだった廃屋。何故あの家を今更に思い出さなくてはならない？
――あぁ、そうだな。
遠い記憶が雪に雑じって降り注ぐ。
あの刀は父が買ってくれたものだった。あの頃は家族三人で豊かだった。何もかもをあの火事が奪った。
父子二人丸裸同然で飛び込んだ実家は僅かな年金で暮らす年寄り夫婦。失った全てを取り戻そうとするかのように朝も夜も無く働かなければならなかった父親。そして、大学を卒業しても老婆の面倒を見る為にと条件をつけ過ぎて就職も出来ないままアルバイトでその日暮らしをする息子。
解っていたのに。父が脇目もふらず働き続けたのは生活のためばかりではなかったと。
知っていたのに。失った全ての代わりを稼ぐことで補おうと懸命に働き続けていた父の気持ちも。
燃えて消えた過去の為に息子の未来まで失わせはしないと大学ま

で行かせてくれたのに、その結果が『婆ちゃんの面倒を見る』事を言い訳に仕事もままならない自分なのだから、父が苛立ちその捌け口を一番の弱者である祖母にぶつけてしまったとしても、仕様のないことであったろう。

――そうだよな、親父が婆ちゃんを邪険にする理由なんて、本当なら無かったんだよな。

パトカーが待つ三叉路の手前で、小川に架かる橋を渡る。

けれど彼はもう振り返らなかったので、気付かなかった。橋の袂に小さな地蔵がしょんぼりと佇んでいることに。

ただ、地蔵を隠すように咲き誇る赤い花の木をちらりと見て、

――あの子供が供えていた花だな。

なんとはなしに思い出す。

――そういえばあいつの手、石みたいに冷たかったな――

彼を乗せたパトカーが走り行くのを、橋の袂の地蔵は赤い花の陰でにっこりと笑んで見送った。

地蔵峠、その名の由来を知る人は今は少ない。

ただ迷う者だけが、出口と共にそれを知る。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8805p/

地蔵峠

2011年1月2日03時55分発行